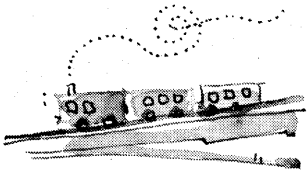

# 幼稚園の外から見た子どもと中から見た子ども

永井康子

思えばもう七年も前のことですが、家で幼稚園を経営している関係で、私はお茶の水女子大の幼教にはいりました。そこでの二年間の学びは本当に素晴らしく、子どもぎらいだった私が、どうしてこんなに好きになったのかと思うほどにまで、私を変えてしまいました。ぜひこのまま幼稚園の先生になりたいと思ったのですが、体育科へ編入学することになりました。児童科ではなく体育科を選んだのは、村田先生のご指導を受けているうちに、自分自身の体育面における足りなさを痛感したからでした。そして二年後、私の家の幼稚園児の交通事故がたて続けに三件起きました。ぜひ何とかしてあげたいという純真な気持ちと、家で経営しているのだからいつでも幼稚園の先生になれるという安易な気持ちから、私は婦人警察官として警視庁にはいったのです。

＊　＊　＊　＊　＊

私が入社した当時の婦警さんの数は微々たるもので、男性の職場における女性の扱い方にも不慣れなため、本当におそまつな働きしかできませんでした。たとえば交通安全教育にしても、焼け石に水であることをしみじみと感じ、情なくなりました。私は、幼稚園の子どもたち、幼い子どもたちを園の外から守ってあげたいと思っていました。なぜならば、交通事故は道路上で起こるのですから……。しかし終局には、交通事故防止は、家庭及び園内の指導から始まらねばならないことを、悟ることになったのです。

＊　＊　＊　＊　＊

警視庁では、子どもの事故防止のために、紙芝居、スライド、指人形などいろいろな小道具を使って、ある地区によってはた

いへん熱心に指導しています。その指導にあたるのが多くの場合婦警さんなのですが、彼女らが受ける六ヵ月の教養期間中には、子どもに関する知識はほんの少ししか与えられないのです。ただ単に〝子どもは衝動的であるから、とび出し事故防止になるような指導をすること〟を教えられます。紙芝居やスライドのほとんどは、そのようなものだったと記憶しています。婦警さんたちは、制服を着て幼稚園に出かけて行きます。どの園へ行っても、子どもたちは集中力を発揮して見たり聞いたりしますから、婦警さんたちは、まあよかったと安心して帰るのです。私も初めはそうでした。しかし回を重ねて行くうちに、安心してはおられないことに気がついたのです。子どもたちにとっては、ついぞ見かけない婦警さんの制服と模造紙大もある大きな紙芝居が、あまりにも珍らしかったのです。多くの婦警さんたちは、子どもの遠近感、相対した時の左右の弁別能力が、自分と同程度であるかのような錯覚をおこしてしまうのです。そのために、かえって子どもたちを混乱させてしまうことさえあります。

とにかく、交通事故防止は、親子ぐるみの指導がなされなければ、とてもよい成果はあげられません。私が園の先生になってからですが、朝、先生方が交代で横断歩道に立って渡しているにもかかわらず、その十メートル手前をお母様方が子どもの手を引いて渡って行くのです。警視庁では、制服の威力でもって事故を防止しようという訳で、警察官を増員してきたそうですが、私がもし制服を着て立っていたら、あの親子は横断歩道を渡っていたかもしれません。誰でも、横断歩道を渡らねばならないことを知っています。しかし、車が来なければ近道をしたくなります。昨年夏、私はオーストラリアへ行きましたが、横断歩道を渡っているのは老人と子どもだけでした。どこでも同じだなあと思っておりますと、台湾では、車の流れの間をぬって人々が道路を横断しているではありませんか。信号が有っても全くその機能が認められていないような交差点もありました。

このように、交通面だけではなく公衆道徳は、外からいくら声をからして叫んでみてもよくなるものではないのです。内側から、個々の自覚によってできあがっていくものではないかと思うのです。また、そのような指導がなされねばならないと思うのです。

このような訳で、婦警さんであった私は、全くと言っていいほど失望してしまいました。幼稚園へ行っても、子どもたちと真に親しい交わりなどとてもできませんし、満足のいくような安全教育はできませんでした。大きな組織の中でいくら情熱を燃やしていても、やがてそれは消滅してしまいそうでした。私

が第一線の婦警さんとして働いたのは本当に短い期間でした。やがて新しく採用された婦警さんを教える立場になったのですが、子どもたちとは遠ざかるばかりでした。自分自身の無力さを痛感すればするほど、私の心は幼稚園へと引きもどされて行きました。こうして警視庁とは、二年でわかれることになったのです。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

幼稚園の先生になり無我夢中で過ごしたこの一年間は、私の二十五年という年月の中で、最も張りがあり、最も素晴らしい日々でした。幼教時代に受けた一つ一つの教えは、四年間園を離れていたにもかかわらず、非常に鮮明な記憶となって残っていました。同期生はもうすっかり先輩になってしまっています。それなのに私はまだ一年生のかけ出しでした。牛島義友先生のおっしゃったように、全く〝自信のない保育者〟でした。でも二十四人の子どものひとりびとりが私自身の本当の子どものように感じられ、心から愛してきました。それぞれが、遅かれ早かれ私と心の交わりができ、親しい関係を持つことができたのです。これは、婦警さんであった時には決して味わうことのできなかった体験でした。そのころ接した子どもたちは、文字通り複雑で、私には何のかかわりあいのない大人の中の子ども、年齢が少ないがゆえに〝子ども〟と呼ばれている人々でした。それだけに、ある面では気が楽でした。安全教育という与えられたノルマさえ果たせば、後はどうなっても責任は無い（と言ってはオーバーかもしれませんが）のです。

ところが、幼稚園のクラス担任の先生となることは重大です。はっきり言ってしまえば、私には四年間のブランクがありました。その間先生になられた方々は、数々の講習会、研究会に出られ、新しい保育技術を身につけて来られました。しかし私には何も無いのです。幼教時代の実習の経験と、イスラエルのキブツの幼稚園でのちょっとした経験以外に何も無いのです。私は毎日毎日が不安で反省することばかりでした。初めのころは、二十四人のひとりひとりに目を留めることができませんでしたので、日々各々の行動をチェックしました。しばらくすると、全体の中の個人が見えてきました。そこで毎日、ひとりに対し最低一回はほめてあげることを試みました。全く手に負えないような子どももおり、非常にむずかしく思われましたが遂行しました。このころから、私と子どもとの間に、たいへん親密な関係が生まれてきたのです。

生まれてからまだ三年余りしかたっていない子どもたちに、いったい何を教えたらいいのでしょうか。カリキュラムに従って教えていくだけで果たしていいのでしょうか。私にこの解答を与えてくれたのはオーストラリアの子どもたちでした。彼ら

はマナーの点で、たいへん厳しくしつけられていました。どんなに小さくても、肩が触れたりした時すぐに〝ごめんね〟と言えるのです。しかし日本ではどうでしょうか。他人に親切にするという点においても〝親切運動〟という形で取り上げられるほど減少しています。〝お友だちと仲良くしましょう〟といくら先生が声をからして言ってみても、子どもたちはいったいどうしたらいいのか、はっきりつかむことができないのではないでしょうか。お互いに許しあうことを学んでいかれるように、指導しなければならないのではないかと私は思いました。

これは社会全体に言えることであって、幼稚園内の教師に依存しているものではないと思います。本当は家庭でなされるべきことだと私は思います。しかし園でせざるを得なかったのです。三歳の子どもたちは本当に純真でした。いろいろの面で、彼らはお互いの理解を深めて行きました。たとえば、〝どうもありがとう――どういたしまして〟〝ごめんね――いいよ〟が、クラス全体に、こんなにまでも徹底するとは思いもよりませんでした。というのは各々の家庭にまで、その影響が及んだということです。

＊　＊　＊　＊　＊

振り返ってみると、婦警さんとしての二年間は事実を客観的な立場で書類にするという、退屈な日々でした。しかし幼稚園における一年間は、書類にする間もない、すぐに反応のある、めまぐるしくて豊かな日々でした。

警視庁ではよく皆さんがこうおっしゃいました。

〝幼稚園なんて、ただ子どもを遊ばせておくだけでいいのでしょう？〟

〝いいえ、ここにこそ大切な教育指導がなされなければならないのです。交通事故防止も少年の不良化防止も、ここにポイントがあるのですよ〟と答えますと、けげんそうに、〝そんなものですかねェ〟

と首をかしげておられました。

要するに、何を第一に考えるのかの違いではないでしょうか。私が警視庁を退職した理由を、いろいろな方々がお尋ねになりました。そのたびに私は答えました。

〝Enforcement よりも Education の方が私には向いているのです。私は子どもたちが好きで好きでたまらないのです〟と。

幼稚園は素晴らしい人間関係の場だと思います。この一年間に子どもたちがいかに成長してきたかを思い返してみるたびに、私は、ひとりひとりの子どもと親しく交わることのできた喜びを、しみじみと感じるのです。

（大泉双葉幼稚園）